

自主教材・「軍記物語の系譜」

——『保元物語』（爲朝生捕り遠流に處せらるる事）を中心にして——

加藤 昌 孝

一 はじめに

ここ数年来、古典の授業は自主教材を編集し展開してきた^①。その理由はいくつかあるが、最大の理由は古典を外国語視する古典離れの、そして現代文も読まない活字離れの高校生に、いかに主体的に古典を読んでもらうか、読ませるかということであった。

いま、子どもたちが、そして教室が閉塞状況にあり、「活字離れ」を越えて「ことば」による疎外状況が子どもたちの中に深刻化しているといわれている。こうした状況を克服すべく、文学教育における「対話」や「批評」の必要性が指摘され、「ことば」による今日的疎外状況・現象を克服しようという試みが実践的に追求されている^②。

私の実践はそうした状況を踏まえながらも、古典教育の中で「対

話」や「批評」の成立の可能性を求めてのものである。

今回の実践は高校三年のものである。

高校三年の「古典」は、よほど奇特な者でないかぎり、国文専攻にでも進学せぬかぎり、人生最後の「古典」になる場合が多い。しかし、その古典を読むラストチャンスの高三の古典の教科書にはさまざまなジャンルの多様な作品が断片的に掲載されているが、何を、どう読ませるのかという統一した視点が欠落している。教科書掲載の断片的な作品群を読み、文法的知識を詰め込み、口語訳するという従来の古典教育の方法・あり方では、「古典離れ」の若者を拡大再生産することになっても、未来を生きる若者の糧にはけつしてなれないと考える。手作りの教科書で、授業の「方法論・過程論・組織論」^④の模索も視野に入れながら、授業を展開することにした。

具体的には、「自主教材・軍記物語の系譜」を、「今昔」の「武士説話」・「保元物語」・「平治物語」・「平家物語」・「太平記」・「義経記」・「曾我物語」の中から副題の「乱世を生きた英雄の生と死」にふさわしい章段を選択して、軍記物語を文学史的にとらえ、ことばを梃子にした「イメージづくり」の授業を試みた。その授業実践を『保元物語』の「授業記録」を中心にして述べることにする。

二 「保元物語」の教材化の視点

『今昔』「武士説話」の授業では、軍記物語の始原的な特徴として、文体的系譜・人物的系譜・悲劇の系譜を確認しながら、「奥六郡（陸奥）」からの、いわば辺境の視点からの読みを展開した。^⑤『保元物語』の授業では、その発展・成長した軍記物語の世界を生徒とともにみていくことにした。

教材化したのは、(1)上巻「新院御所各門々固めの事付けたり軍評定の事」(2)中巻「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事(前半部)」(3)下巻「爲朝生捕り遠流に處せらるる事」の三章段である。

(1)には「保元の乱」の人的配置(主に崇徳上皇側の配置)、爲朝の体格・武具の詳細な紹介が描かれる。さらに乱の予告、つまり爲朝と左大臣頼長の作戦をめぐる対立を通じて、「貴族の伝統的權威」の失墜が描かれる。この章段を授業の導入として設定した。

(2)には、爲朝の守る門を恐れて一戦もせず逃げ出す平家の棟梁清盛の姿が描かれる。その清盛に比して、「一所懸命」な中世の人間の典型的な行動と論理が語られる。爲朝に死を覚悟して単身立ち向かう山田維行の姿にそれがうかがえる。同様の『今昔』の場面の形象の質に比して飛躍的發展を遂げていることも読み取れる。この場面における重盛の姿も凜々しい。(『平治物語』で義平と戦う重盛像の伏線の人物形象として押さえられる)このような人物的形象を具体的に読み取る作業もこの章段の目的としたい。

(3)下巻「爲朝生捕り遠流に處せらるる事」の章段では、冒頭に「保元の乱」の結果が語られる。さらに「左大臣と云不覚仁にさへられて」「親父兄弟」をみな失ったと語る。敗戦後、再起を期しての孤独な逃亡生活の果てに、爲朝は重病を得、闘病生活を余儀なくさせられる。その爲朝を追っ手が襲う。病ゆえに、体力を失っていた彼は、大立ち回りの末に「生捕り」にされ、直ちにその身柄を都へ送られる。「生捕り」の場面の爲朝の動きは圧巻である。「英雄」にふさわしい形象が与えられている。都に送られた彼は、「公卿僉議」の結果、信西の「自今以後弓を引せぬ様に相計べし」^⑦の言葉によって、「左右の腕を撃」で破壊され伊豆へ流されていく。伊豆へ下る途中の爲朝は天皇に敵対した「鬼神・化物」^⑧、「荒ぶる」英雄として語られる。

「今昔」の登場人物とは異なり「保元」の登場人物には表情があり心がある。そこを読み取らせることによって、軍記物語の成長・発展の軌道が確かめられるかもしれない。

なお教材の本文は「日本古典大系本」を用いた。

三 授業記録——「爲朝生捕り遠流に處せらるる

事（爲朝の大立ち回り・生捕り、伊豆護送の途における爲朝の姿）——

冒頭の「抑新院の御身には左大臣殿ゆ、しく事を行ひ給ひ」から「若左大臣殿爲朝が謀に随ひ給たりせば、何かはあらましと萬人舌を振合り」の部分を通読し、「導入」として位置づけた。「保元の乱」の事件、人物関係を整理し、乱後の悲劇について概説した。乱後の悲劇については、爲義の最期、「船岡山」の悲劇、爲義の北の方の入水等に触れ、一人爲朝が追っ手の目をのがれ、逃亡生活をしている点を述べ「爲朝生捕り」につないだ。この場面の授業を二時間行なったが紙数の都合でその一部を授業記録として記す。

◇一時間目（爲朝の逃亡生活の果ての病・生捕り）

T 今日と次の時間で「爲朝生捕り」そして伊豆への「遠流」のどこやるぞ。さっそく読んでみるわな。

T 読む（「八郎爲朝は近江国にありけるが、昼は山にかくれ」……「おほけなき心ぞ付にける」まで）——

今読んだとこ、難しい言葉はないと思うけど、どうや質問あるか？

S 1 「そのみやは野山に臥さん事も物うくて」

S 2 その前の「打入、をし入せさせて」

S 3 「頭陞せさせて」

T 「保元の乱」の大勢は決まって、院側についた者の厳しい処断があつたけど、爲朝は行方をくらましていた。爲朝は郎等一人を連れて逃亡生活をしてる。「昼は山にかくれ、夜は里に出て」やな。S 2の質問から先に答えるけど、爲朝は郎等に「打入」「をし入」させたということは、どういうことや、S 2、わかったか？

S 2 村を襲わせて食料などを奪わせることですか？

T そういうことやな、そんなことばかりしてもアカン、と
S 1 いうのが、S 1の質問……S 1、どうや？わかるわな。

S 1 ということは、野山に寝て、物を奪って逃亡生活するの
嫌になって……

T 嫌になって、つらくなって、「片山寺に立寄」、郎等を「法師」にしたわけや。それで「頭陞」させたんやな、鴟外の

『寒山捨得』に出てきた「行脚」「乞食」と同じ、といつても覚えてへんわな（笑い）いろんな所や家を回って、生活の物資をもらう修業僧にしたんや、自分の郎等を。

S 4

「片山寺」はどの辺りにある寺ですか？

T

はつきりしないけど、これ固有名詞のお寺じゃないんや、「片田舎」って使われる「片」やと思うんや、だから、ある「山寺」でいいんちゃうかな。ある「山寺」に、爲朝が身を隠していたということやろな。次にシンドイ逃亡生活の中で爲朝が「保元の乱」を「回想」する言葉、「つくづく」と考えたことの中身をみてみようか。爲朝の言葉から「形容詞」、三つ探してみい、そこに爲朝の心境がこめられてるから。S 5、答えてみてくれるか。

S 5

「口惜し」と「悔し」はわかるんですが、もう一つがわかりません。

T

「安し」の未然形や、「安から」と打ち消しの「ず」の連体形「ぬ」。「安し」は心が穏やかである、ここは穏やかでない、続いて「不覚仁にさへられて」やから、もっときつい思いがこめられてる……それにしても腹が立つという爲朝の怒りとした方がいいかもな、「不覚仁」は覚悟の足らない人、「さへられて」は邪魔されてや。「不覚仁にさへられ

て」は、具体的にどういうことやった？ S 6。

爲朝が戦さの作戦を聞かれた時、「夜討ち」を提案したのに、頼長が拒否して明日の朝やってくる奈良からの軍勢を待とうとしたこと。

T

義朝に夜討ちをかけられ敗れたんやな。S 7、「口惜し」と「悔し」は何に對してや？

S 7

「口惜し」は父・兄弟が殺され、自分もシンドイ状態になってしまったこと、「悔し」は兄義朝を射殺せたのに、頼をかすめる矢を放つてわざと助けてやったけど、その父を兄が殺したこと。

T

清盛と後白河の側近の信西との策略だったらしいけどな。まあいいか。爲朝の憤慨、怒りを三つの形容詞から読み取ってくれたらいい。「口惜し」と「悔し」、残念だという点

S 8

は一緒なんやけど、少し違う点があるから説明しとくわな。「悔し」の方があとで振り返って残念、あんなことをしなければよかったという気持ちがあるからこめられてる。「後悔先に立たず」……お前らの試験の後と同じやな（笑い）S 8、

T

爲朝はそれから何をしようとした？

S 8

鎮西に戻り軍勢を引きつれて再び京の都へ戻ろうとした。それから？

S 8 兄義朝はその時も邪魔するだろうから、今度こそ討ち取る。

T 「義朝つかんで提げ、頸ねじきつて」、これもものすごいわな。それから？

S 8 「新院の御世となし、日本国の惣追補師」になろうとして

る、そうなたつても、「何の子細か有べき」と威張つてる。

T そうやな、何か威張つてる感じするな……ここ実際の戦さ場やないけど、迫力ある描写になつてる。何でやと思う？

S 8 「懸破て」「提げ」「頸ねじきつて」「手向奉り」「追なびかして」、動詞の連用形が使われてるから。

T 実際の戦さ場とちゃうけど、怒る爲朝の凄まじさを示すために戦さ場同様の表現方法が用いられたんやな。

S 9 「縦百萬騎」の数詞も爲朝の凄まじさを示す言葉や、思うんですけど。

T それ、数詞による誇張表現やな。ほか何かないか？

S 5 「定而」、これも副詞のきつとか必ずのことですか？

T 正解。
S 5 「新院の御世となし」は、乱後「讃岐」に流された崇徳上皇を都へ再び戻すということですか？

T 保元の乱は後白河天皇、義朝、清盛側の勝利に終わったけど、爲朝はもう一度九州へ戻って再起し、崇徳上皇の世に

戻して、自分が武士の棟梁になろうとしてるんやな。

S 5 そうすると「おほけなき心ぞ付にける」は、そういう爲朝の野望に対する批判になるんですか？

T いいとこ気がついた、「おほけなき」は身のほどしらずなというか身分不相応のことやから、爲朝の大それた考えに

対する作者・語り手の批判と考えたらしいな。あとで「大天狗」「鬼神・化物」の爲朝と出てくるから、そこまでこの点保留しておこう。次、いつてみようか。

—— T 読む（「然間いそぎ下らんと思ひけるが」……「怖懼、恠をなす」まで）——

質問？

S 1 「いそぎ下らん」は、爲朝が急いで九州へ行こうとしたことですか？

T その時に都合の悪いことが出てくる、何や？

S 1 家貞たちが九州からやってきた。

T それ具体的に言うのと？
S 1 「鎮西より大勢にて上洛したりけるが、郎等共淀河尻に充滿したりければ」
T そこやな、家貞は平家の歴戦の武将、平家の重鎮。彼が九州から軍勢を引きつれて上洛してきた。「河尻」は河口の

ことやから、淀河の「河尻」は大阪方面やな。人間駄目になる時は都合の悪いことが重なるんやな。徹底的に駄目になる……その作者の気持ちもこめられた言葉、S 10、わかるか。

S 10

「時分悪しかりなん」

T それ、家貞の上洛について言ってるんやな、時が悪いという……もつとストリートにどうか、爲朝には浮上することは不可能というか……

S 10

先生「宿運や尽にけん」やろ。絶対これや。

T 絶対それや（笑い）S 10、そんなに喜ばんとその意味を言ってみい？

S 10

爲朝の運命が尽きたのだろうか。

T 「宿運」は前世から定まってるその人に与えられた運命・宿命。仏教用語。それで爲朝はどうなる？

S 11

重病にかかる。

T 病気になるというのは爲朝も人間だったということやな。

ほかに質問ないか？

S 3

「立居も合期せざりければ」

T 爲朝は「萬死一生」、奇跡的に助かったんやけど、病み上がりで身体が思う通りに動かない、S 3、お前こういうこ

とないか、インフルエンザの高熱が続いて、やっと立ち上がった時、身体がふらふらしたことないか、わし、十五年

前にB型肝炎で死にかけたことあるから、ようわかるわ、ここ。わしの場合、不死身やから立ち直ったけどな、色黒

いし、しぶといし、みんなから嫌われてるから、その頃のお前らの先輩、わしのことゴキブリって呼んでたわ（笑い）なかなかセンスあるわな、びったりやわゴキブリ（笑い）ほかに質問は？

S 4

「ゆや」は温泉ですか？

S 4

滋賀県に温泉あったかな、どうや？
わかりません。

T

そうやな、わしもあんまり聞いたことないわ。神社やお寺には、参拝する人が身体を清める場所があったから、きつとそういう施設やと思う。中世には社会からの脱落者や犯罪者を保護した特定の寺社があったというから……大阪の

「天王寺」や「高野山」がそうだったらしい。この「ゆや」

もそういう「避難所」だったかも知れんな。「中世の福祉施設」みたいなもんやろかな。ちよつと誰か研究してみい

へんか。おもしろいで、まあいいか……とにかく爲朝は「ゆや」で病後の「療治」していたところを、人に見られ

てしまうんやな。S5、誰に見られたんや？

S5 「甲乙人」

T その前に「をり合たる」とあるから、この「ゆや」にいろんな人が来てたことがわかるわな。「中世の福祉施設」だったんかな、「避難所」やったんかな。やっぱり……「甲乙人」の見た爲朝、自分の言葉で説明してくれるか？

S5 先生、その前に「甲乙人」、よくわかりません。

T 身分の高い人や低い人、老若男女、「いろんな人」って、さっき言ったのはそういう意味。

S5 先生、この「ゆや」は混浴やったんですか（笑い）

T わしもはつきりわからへん、後で「男女」と出てくるからたぶんそうやろ。「混浴問題」、ちょっとおいといて、さっきの質問。

S5 「人間の人は見えず。愛宕・高尾の大天狗」、先生、「天狗」、いいへんわな。

T わし、見たことあらへんけど、当時はいたんやろな、義経も鞍馬の天狗に鍛えられたそうやから。

S5 ほんまかいな……

T 天狗も鬼も化物もみんないたんや、今は人間に追われて絶滅したんや。狼も絶滅、朱鷺も日本川獺も時代とともに、

人間に追われて絶滅しかかっている……淀川の蜚も……人間も核兵器に追われて絶滅しかかっている……

S5 先生、嘘やろ……

T 嘘です（笑い）、しかし当時の人は存在する信じていた。「鬼」とか「天狗」とか「竜」とか想像上の生き物やな。

T 「天狗」は空を飛べたらいい。ようするに人間離れたものやな。ここでは爲朝の人間離れた巨人の姿が、災いしたんやな。「人間離れたものすごい男がいる」と噂になったんやな。

S8 淀川の蜚、最近、戻ってきてます。

T そうか、そりゃあ嬉しいことや。この学年に大学行って、淀川の水守る、研究するっていう生徒いるんや。わし、こういう人物と、年齢ちゃうけどお友達でいたいわ（笑い）わし、こういう生徒に出会えて嬉しいわ（笑い）……次、読むで、ちょっと長いで。

T 読む（「所の土民是をみて、領主佐渡兵衛尉重貞に告たりければ……をめをめと生捕れけるぞ無慙なる」まで——爲朝の噂が広まって、「所の土民」から領主の耳に届く。「所の土民」とさっき出てた「甲乙人」とは明らかに違うのわかるわな。どこから「ゆや」に来てた人たちやな、

やっぱり。S 12、領主重貞はまずどうした？

S 12 爲朝を知ってる「雑色」に確認させた。

T 爲朝に間違いない、そこで？

S 12 三百余人で捕まえに行かせた。

T S 12、念のために数詞、あげてみい。

S 12 今言った、「三百余人」「浴屋を四重五重」「した、かの者

T 十四五人」「三人手組して」「三人ながら」「一人をば」「一

T 人をば」「柱一本」

T じゃ、そのほかの表現方法は？

S 6 動詞の連用形の多用、実況生中継的表現。

T それも具体的に。

S 6 「催集て」「押寄て」「押かこみ」「撰て」「乱入て」

T それから。

S 6 「引寄」「打合せ」「ひしゐで」「押當て」「ねち切て」

T それぐらいにしとこうか、そのほかの表現の方法は？

S 10 「……もあり……もあり」の表現。

T 「のつけさまに倒て死もあり、這々逝る者もあり」やな。

S 10 それ『今昔』やった時、何て言っておいた？

T 累層的表現やったかな……

T そう、同時進行の場面を描写する累層的表現やな。

S 10

擬音語・擬態語もある。

T

S 10 どれや？

S 3

T 「つむと立て」

T

S 3 もう一つ……これ、わかりにくいかな……

T

S 3 「ひしひし」ですか？

T

S 3 そう、その二つ。ついでやから、繰り返しの表現も言っと

T

S 3 くわな。繰り返しは強調やな。「走寄く」「落重く」の

T

S 3 とこ。もう一回、戦闘の場面読んでみるから、イメージつ

S 11

S 11 くつてみてくれるか。今具体的にあげた表現方法に特に注

S 10

S 10 意して、聞いてくれるか……(T 読む)
浮んだイメージ、自由に言ってみてくれるか。
大勢の軍勢を相手に一人で暴れまくっている。
爲朝と一緒に「浴屋」の中にいた者たちが、悲鳴をあげて
外へ飛び出してきた。
浴屋の中、物凄い音がしてる。
爲朝が振り回す柱の音がぶんぶんしてる。振り回す柱にぶ
つかる音、そんで、はじき飛ばされる者の悲鳴。
柱にぶつかる音、グシヤアつちゅう感じ。柱に血が飛ぶ。
軍勢が逃げ回ってる。そん中を爲朝が走り回ってる。
柱を振り回すスピードが鈍くなってくる。爲朝の息が荒く

なってる。爲朝が倒れる。

T 倒れた爲朝に重貞の軍勢は黙って向かっていったのか？

S 5 何かわめきながら飛びかかっていった。

S 8 大勢がのしかかっても、爲朝は拳を振り回している。

S 5 こいつ、何ちゅうやつちゃ、化物やわ、やつぱり。

T そのくらいでもういいかな、わからへん言葉ないか？

S 11 「三人手組してよる所」

T ラグビーのスクラムの第一列、三人で組んで相手にプレッ

シャーかけるやろ、あれと同じやな。

S 11 「三人ながら」

T 三人全部まとめて。

S 8 「暫しこそ有けれ」

T 暫くの間はそうしていたが、爲朝が暫くは戦っていたが。

S 10 の言ったスピードが鈍くなり息が荒くなり手足の力が

なくなっていく、そういう状態を表現した言葉やな。質問、

もういいかな？

(以下略)

四 古典教育をめぐる

かつて増淵恒吉氏は、「古文教育の方法」¹⁰⁾の中で戦後の古典教育

を総括し今後の方向性を提起し、その中で第一に教材の自主編成をあげた。小野牧夫氏は、「形象性・思想性・教育性においてすぐれたもの」¹¹⁾を教材の自主編成の基準として指摘する。さらに小野氏は「読解第一主義から古典教育を解放し、広い場に出すこと」も提起している。この二つの論を踏まえ、そして「はじめに」に記した今日の子ども、目の前の子どもの実態に視点を据えた教材づくりや古典教育の実践的方法の構築が、いま全国的に要請されているような気がする。しかし古典教育に関する全国的な実践的共同研究の場は定着していないし、全国的な組合の教育研究会においても古典教育の実践報告を目にすることが少ない。古典教育が受験教育に矮小化されてしまっているためだろう。こうした現況をみる時、「文学教育としての古典教育」は教育の現場から遊離し、「古典」は専門的学問研究の場に隔離されてしまったような気さえする。「自由な教室空間」の中で「対話」を積み重ねながら、「文学教育としての古典教育」の授業の創造をめざして、方法的には古典語の呪縛から生徒を解放する「イメージづくり」の実践を試みた。「授業記録」に明らかのように、まだ鼻持ちならぬ教師の「知の権威化」現象がみられる。さらに生徒相互の「対話」が組織できていないし、集団的読みが成立していない。今後の課題である。

生徒の作品や授業に対する「批評」について、紙数の都合で触れ

ることができなかった。その点、「授業記録」から推測してもら
うほかはない。

注

- ① 拙著『授業記録——古典文学を読む』（高校出版）
- ② 高野光男氏「批評する文学教育——第四十五回夏期研究会基調報告——」（『日本文学』一九九三年十二月号）
- ③ 浜本純逸氏「文学作品との対話」（『日本文学』一九九〇年八月号）
「対話への文学教育」（『日本文学』一九九二年三月号）
- ④ 小野牧夫氏「古典教育の実践と理論」（『国語・文学教育の研究』所収、秀英出版）氏の提起する教材論・指導過程論・授業組織論を参考にした。
- ⑤ 拙稿「授業記録・軍記物語の系譜 乱世を生きた英雄の生と死をめぐる」（『日文協・国語教育』一九九四年八月号）
- ⑥ 杉本圭三郎氏「変革期の叙事文学」（『日本の中世文学』所収、新日本出版）
- ⑦ 後白河天皇側近信西は、爲義の処刑同様、爲朝の処置を肉親である兄義朝に命ずる。非情な措置である。
- ⑧ 「新院御所各門々固めの事」の「田村・利仁が鬼神をせめ、頼光・保昌の魔軍をやぶりし」からも朝廷（天皇）に背いた者は、「鬼」「魔」、時には「化物」とされたようである。
- ⑨ 「荒夫琉神」（『古事記』）「荒振神」（『常陸風土記』）「荒備流」（『続日本紀』）などの漢字で表記されるが、いずれも東国・陸奥の荒々しい神、天皇に従わぬ神々の呼称である。『続日本紀』には「陸奥國荒備流蝦夷等乎討治」とあり、朝廷に背く者の象徴的存在が「荒ぶる神」とされたのである。伊豆へ護送される爲朝の言動はまさしく「荒ぶる神」そのもの

の姿である。

- ⑩ 清盛が伯父忠正を処刑したのは、義朝に父爲義を処刑させるためであり「信西に内々いひ合て」行なった処置である。『保元物語』「忠正・家弘等誅せらるる事」で語る。
- ⑪ 岩崎武夫氏「さんせう太夫」の構造」（『さんせう太夫考』中世の説教語り平凡社選書）
- ⑫ 増淵恒吉氏「古文教育の方法」（『高等学校国語教育研究講座 第八巻』所収、有精堂）
- ⑬ 注④に同じ。